



花ごよみ

花ごよみでは自然に桜の咲く頃とか楓が紅葉する頃などといえます。椿、梅、桜、藤、蓮、菊、楓と、暦は花の咲く時期に分かれているようです。桜のつぼみが顔を出し、膨らみ、徐々に花開く。これは私たちにとって大きな関心事であり、つぼみの膨らむ様子がニュースになる国は他にないようです。

さて、3月は別れの季節です。
 コノサカヅキヲ 受ケテクレ
 ドウゾ ナミナミ ツガシテ
 オクレ この詩は
 ハナニ アラシノタトヘモア
 ルゾ サヨナラダケガ 人生
 ダ と続きます。

中世以降、花と言えば桜です。
 願はくは 花の下にて春死なむ
 そのきさらぎの望月のころ

西行法師は花の下で、釈迦入滅の日、きさらぎの望月、(旧暦の2月15日)に旅立ち

たいと詠みました。西行が没したのは願い通りその翌日でした。今年は今月27日が、その望月(満月)に当たります。
 松尾芭蕉は桜の名所奈良県吉野山で3日間も花を眺めながら、感極まって一句もできなかったといわれます。吉野山にまだ行ったことはありませんが、絶景を前に立ち尽くす芭蕉の姿が目に見えそうです。

記憶をたどれば、満開の桜と重なるのは入学式でした。今では、小学校、中学校の卒業式が満開のピークになり、子どもたちの桜の思い出は卒業式とともに刻まれています。
 桜の老木が、幹の中は腐れて空洞になりながらも精いっぱいみずみずしいピンクの花を咲かせています。このけなげさ、花の命の短さが、多くの日本人の心を動かしてきたのでしよう。
 桜を歌った詩歌には名作が多いようです。

世の中に たえて桜のなかりせば 春の心は のどけからまし

在原業平は、桜の花を「胸の高鳴りを抑えきれない恋人」のように捉えたのではないのかと私は感じます。

近づいてみれば、色もはっきりしない白い花ですが、桜の花には人の心を波立たせるような不思議な魅力があります。

桜には、人それぞれ格別の思いがあります。森山直太郎の「さくら(独唱)」、ケツメイシの「さくら」、コブクロの「桜」とどれも名曲です。なぜこれほど桜は人の心を騒がすのか、花の盛りに花の下に立てば、答えが見つかるかもしれません。



指宿市長
 豊留悦男